

シンポジウム 「歴史・経験・論理」 趣旨説明

井上克人

人間は誰しも、ある特定の時代、地域、自然的風土、そして自らが属する民族の歴史的・社会的環境のなかに生まれ、そこから多彩な文化を形成してきた。世界にはキリスト教文化、儒教文化、仏教文化、イスラーム文化など種々さまざまな文化が存在し、各民族はそれぞれの文化圏のなかで思考し、生活しているが、長い年月を経て培われてきた文化的伝統はその民族の普段の生活習慣に浸潤しており、異文化の介入を容易には認めがたい排他性をも併せ持っていることは誰しも認めるであろう。各個人は自らが属する共同体の、慣れ親しんだ生活世界の中で自分を理解し、自己自身とかかわりながら、さらに未知なるもの、異他なるものと出会うなかで、それを咀嚼し、既知なるものへと取り込みながら自らの生活を営んでおり、それが個人の具体的経験を形成している。

ところで、人間にとってのそうした自然的風土や歴史的・社会的環境は、いったいどのような形で民族に、そして個人の経験に影響を及ぼし、またそれがどのような過程を経て文化へと展開していくのであろうか。ここでとくに留意しておきたいのは、人間と自然的・歴史的環境との〈あいだ〉に介在する「想像力（イメージ）」である。くわしく言えば、ものを認識する際にいわばフィルターのようなはたらきをする空間感覚・時間感覚の内に、それぞれの民族に特有な種の感受性が介在していて、また多種多様な文化が形成されてくるのも、このような想像力（イメージ）に基づいていると言っても過言ではない。最初に存在するのは人間が自然に対してもつある根源的なイメージであって、そのイメージは、一民族の神話、あるいは比喩、ものたとえ、というかたちで、社会全体の中に表現されている。

神話や比喻は、それを作り出した原始時代の人たちにとって、いわば世界のすべてであった。古代の人間は何が人間であり、何が自然であるか、何が主体であり、何が環境であるか、といった二項対立的な見方はしなかった。まず最初にあったのは自分を取り巻く自然環境に対する一つのイメージであり、たとえば海というものについて、ある民族は、それを冒険の世界、人間の戦場であるとして思い浮かべ、また別の民族は、それをいわば永遠の世界、永遠の静寂の世界として眺め、そこに出てゆくことは、人間にとって最後の安らぎを意味していると考えた。海という一つの自然が、はじめからそういう意味を帯びた存在として、ひとつの象徴的な存在として見えていたわけである。まず海という自然的実体、物理的な実体というものがあって、それを人間がどう見たかというのではなく、まず最初に海についてのある種のイメージが存在する。同じ山があり、同じ海があっても、それが持っている意味、あるいはそれが与える表情というものは、受け取る民族によってさまざまであろう。そしてさまざまな民族が見ている山や海が、同一の山であり、同一の海であるということは、じつは後から考えた人工的な結論に過ぎない。このように、最初の真実とは、それぞれ違った海の表情であり、山のイメージであって、それが深く人間の文化というものを決定しているのではないだろうか。人間の歴史と文化を作り出してゆくのは、いわゆる人間主体というようなものでもなければ、いわゆる環境というもの

でもなくて、いわばその両者の〈あいだ〉にあって、両者をとくに生み出す根源的なイメージそれ自身が文化の性格を作っていると言えよう。

ところで、次に考えたいのは、上述のような歴史的・自然的環境のなかで、それらに対するイメージを通して培われてきた個人にとつての「経験」とはいったい何か、ということである。つまり経験は自分が属する共同体に共通に見いだされる根源的イメージに付らなりながらも、同時に、どこまでも個人の感受性として、私秘的な領域にも属している。経験とは一人の個人としての人格をあらわす根拠ともなり、支柱にもなる。言い換えれば、個人の経験が時を経て次第に深まってゆくことによって自分自身と出会い、おのれを見いだしてゆくこともある。しかしそれは外から強制されて形成されるものではなく、どこまでも内発的に、自らの感覚による発見をおして次第に成熟してゆくものである。ところがそうした経験がもつ自己発見の階梯が、同時にそれをとおして自己を乗り越えてゆくこと、すなわち自己の恣意性、偶然性、主観性から抜け出し、〈もの〉の本来あるべき姿を見きわめてゆくことにもつながり、言葉の深い意味において、客観的・普遍的になるということでもある。いうなれば経験とは、あるべき本来のものに向かつての内発的な歩みであるとも考えられ、それは〈時〉を経て豊かに熟成していくものではないだろうか。このように、経験が普遍性につながる以上、そこにはおのずか

ら「論理」が存在しよう。普遍性とは、畢竟「論理」にほかならないからである。個人の自覚史という意味では、本来そうあるべき自己への階梯として、いわばそこからそこへと経歴する（時）のロゴスがあり、そして発見さるべき（もの）のアレテーアともいべき（存在）のロゴスがある。さらに敷衍して言えば、経験が自己自身と（もの）の真実への発見へのプロセスであることからすれば、それ自身歴史的な側面を併せもっている。歴史は人間の個人にとっては、決して均質的で空虚な連続的時間経過ではありえない。むしろ（時）の熟成に裏打ちされた（今）の充盈としての時間でもある。

考えてみれば、人間生活のあらゆる現象はいずれも個別具体的な歴史的時空において発生し継続し消滅するものであり、（もの）を捉える場合でも、物理的時間・空間概念とは別の歴史的流れのなかにおいてその生成と発展とを捉えなければならぬように思える。その場合、大切なことは、歴史を均質で空虚な連続体という觀念から解放すること、言い換えれば過去を現在時として捉えることではないだろうか。過去の現在化、それは回想と呼べるのかもしれない。そして回想とは、根源へ遡る想起の営みにはかならない。ベンヤミンに倣って言えば、〈失われた過去〉、つまり本来そうあるべきであったにもかかわらず、今となつては取り返しのつかない、そうした過去への痛みに満ちた追憶であろう。そこに現在における乖離の感覚が鮮明になり、と同時にそうした乖離

によってはじめて露現してくる（本質―真理）への促しが出てくるのではないだろうか。経験の深まりによって見えてくる（もの）の真実とは、そうした（ほろびと衰亡）という、それ自身覆蔽的な歴史的イメージをとおして見えてくる真理（ロゴス）であるように思えてならない。

（いのうえ・かつひと、宗教哲学・比較思想、

関西大学教授）